新春特別対談

「野鳥の魅力を語る」

応接室には、この日の訪問のためにタンチョウの絵画をかけてくださいました

高円宮妃久子殿下 × 柳生 博

2014年9月5日、東京赤坂御用地内・高円宮邸にて

当会がパートナー団体として加盟し、ともに鳥類やその生息地の保全に取り組んでいるバードライフ・インターナショナル。その名誉総裁でいらっしゃる高円宮妃久子殿下をお訪ねし、野鳥の魅力や自然保護のこれからについてうかがいました。

撮影／佐藤信敏　構成／奈落一騎

バードウォッチングが取り持つご縁

柳生博会長（以下柳生） あらためまして、お嬢様の典子様と出雲大社権宮司でいらっしゃる千家国麿様のご結婚、誠におめでとうございます。

高円宮妃久子殿下（以下妃殿下） ありがとうございます。

柳生 ご結婚のきっかけは、お二人の共通のご趣味のバードウォッチングだったそうですね。新聞もテレビも揃って、「バードウォッチングが取り持つご縁」と報道していました。「バードウォッチング」という文字が新聞にあんなに大きく印刷されているのを初めて見ましたので、このご結婚を野鳥の会の職員みんなで大変うれしく思い、喜びました。

典子様がバードウォッチングに親しまれるようになったのは、やはり妃殿下の影響ですか？

妃殿下 そうですね。娘たちが子どもの頃から、バードウォッチングにはいっしょに出かけていましたが、「鳥は好きだけれども、お母様のように1種類の鳥を、じっと4時間も見つづけるのは大変」と言われたこともあります（笑）。

出雲は自然も文化も豊かな場所で、子どもとよく行きました。特に、出雲平野と斐伊川河口は野鳥の生息環境がコンパクトに備わっているので、バードウォッチングには最高です。地元の方たちと野鳥の関係が実に自然であるためか、鳥がひどく警戒することがなく、車の中からであれば間近で観察や撮影ができます。日御碕ではウミネコはもちろん、柱状節理（※）の岩場でイソヒヨドリの写真も撮りました。

バードライフ・インターナショナルの使命

柳生 妃殿下は鳥類や自然保護を目的とする国際組織であるバードライフ・インターナショナル（以下、バードライフ）の名誉総裁を務めていらっしゃいますね。日本野鳥の会もバードライフのパートナー団体として加盟しています。

妃殿下 お世話になっております。

柳生 妃殿下がバードライフの名誉総裁に就任されたのは2003年の3月ですが、じつは私が日本野鳥の会の会長になったのも同じ年の6月です。

妃殿下 同級生みたいなものですね。

柳生 組織の規模は全然違いますが（笑）。現在、バードライフのパートナー組織は120か国にあるそうですね。

妃殿下 はい。総会員数は、約277万人です。バードライフは、どこかの国に行って新しく自分たちが支部を立ち上げることは少なくて、通常はそこでずっと活動しておられる民間団体にパートナーとして入っていただいています。地域によって事情も異なりますし、外から入ってきた団体なり人なりが活動すると無理がでますから、とても理にかなった活動展開であると思います。きわめて現場重視というのが、バードライフの大きな特徴です。

柳生 名誉総裁として、お役目が多くて大変ではありませんか？

妃殿下 そもそも鳥が好きでしたので、バードウォッチングをする口実になるのでは……などと考えたりして（笑）、渡りに船でした。名誉総裁になってからは、国内外に関わらずどの地域に行っても、公務が始まる前の朝の時間帯を、可能であればバードウォッチングにあてています。

柳生 そういうときは、地元の方がサポートにつかれる

※柱状節理――岩石中に形成された柱状のわれ目（節理）のこと

のですか？

妃殿下　はい。日本では、野鳥の会の方々がご案内くださることもずいぶんありますよ。限られた時間なので、皆さんとてもいいスポットにご案内くださいます。至れり尽くせりで申し訳ないぐらいです。

シマフクロウの一瞬を写真で切り取る

柳生　私は妃殿下の撮られる鳥の写真が大好きなんです。今日は妃殿下の撮られた鳥の写真集（『寄り鳥 見鳥』産経新聞出版）も持ってきたのですが、このトビの写真も素敵ですね。

妃殿下　出雲の日御碕で撮ったものです。

柳生　私は八ヶ岳の高いところに住んでいますから、気候が変わって上昇気流があるとトビがよくやって来ます。私はうれしくなるのですが、周りはあまり関心をもってくれなくて……。

妃殿下　そういった方が多いですね（笑）。ですが、海辺のホテルの部屋から、トビが飛ぶ姿を見かけたりすると、やはり美しいと思いますね。

　野鳥写真を撮っている方も、大体「なぁんだ、トビか」と見向きもされませんが、イギリスでレッドカイトを見たら、いっせいにシャッターを切ります。色が違うだけで、注目を浴びたり浴びなかったり、かわいそうに感じることもあります。

柳生　アカトビですね。絶滅寸前だからという珍しさもあるのでしょう。

妃殿下　はい。日本では煙たがられるカラスの仲間でも、こぞって写真を撮る場合もありますからね。

柳生　シマフクロウの写真も素晴らしいですね。大きな目がしっかりこちらを向いていて、しかもフォーカスがみごとに合っています。

野性の生きものは、子どもの頃から身近な存在。
昆虫や鳥の羽などをよく標本にしていました。
―― 高円宮妃久子殿下

新春特別対談
「野鳥の魅力を語る」

高円宮妃久子殿下
香川県の旧家、鳥取滋治郎氏の長女としてご誕生。中等科まで聖心女子学院で学んだ後、父親の転勤のため渡英。ケンブリッジ大学ガートン・カレッジで中国学や人類学・考古学を学ぶ。84年、高円宮憲仁親王殿下とご結婚。（社）いけばなインターナショナル名誉総裁、日本赤十字社名誉副総裁などの他、高円宮殿下薨去後は、日本サッカー協会名誉総裁などを引き継がれている。

妃殿下　この写真を撮ったときは周囲が真っ暗でしたが、「いま絶対、目が写った」という確信がありました。

柳生　妃殿下もすごいけれど、このシマフクロウもすごいですね。撮られていることをわかっているように見えます。妃殿下との間に、何か通じ合うものがあったのでしょう。

妃殿下　これは本当にうれしかったですね。

高円宮殿下の思い出のカメラ

柳生　ところで、妃殿下は亡くなられた高円宮殿下のカメラを使っているとおうかがいしたのですが。

妃殿下　もとはそうだったのですが、いまは新しいデジタル・カメラです。一台だけ宮様のフィルム・カメラをまだ使っていますけれど。

柳生　そうですか。

妃殿下　私は大学時代に写真部に所属していたのですが、結婚してからは撮らなくなりました。高校時代に写真部にいらした宮様がかなり本格的に撮影されていましたから、素人の私の出る幕ではなくて。

柳生　遠慮なさったんですね。

妃殿下　亡くなられたあとは、宮様のご遺品のカメラをしばらく廊下の棚に並べて置いていました。でも、廊下を通るたびにカメラが目に入ると、まるで散歩に連れていってもらえていない犬がリードをくわえて私を見ているような気がして、「ごめんなさい」と言いながら通っていたんです。やはりカメラは使わないと痛んでしまうものですし、だんだん写真を再開しようと思うようになりました。

　相談をした友人のカメラマンの方が「何かテーマを決めて、自分の好きなものを撮ったらいかがですか？」と言ってくださったので、鳥と根付を撮るようになり、それがいまも続いています。

柳生　高円宮殿下も野鳥を撮られていたんですか？

妃殿下　宮様は、なんでもお撮りになりました。とてもお上手で、シャッターもひとつのシーンに対して2回ぐらいしか押されなかったですね。

少女時代の日記は生きもののことばかり

柳生　妃殿下の野鳥写真を見ていると、凄腕であられるのはもちろん、自然に対する感性のようなものを感じます。子どものころはどんな環境で過ごされていたのですか？

妃殿下　私の実家は東京の白金なのですが、近所には聖心女子学院の敷地があったり、国立科学博物館付属の自然教育園があったりと、都会ながら緑の豊かな環境でした。自宅の庭にも枇杷（びわ）や梨など実のなる木がたくさん植わっていましたから、昆虫や野鳥は子どもの頃から身近なものでした。

　私は一人っ子だったものですから、庭に出て何かをじっと観察するのが日課になっていましたね。昆虫や鳥の羽根などをよく標本にしていました。

柳生　おじい様やお父様が、生きものにおくわしかったのですか？

妃殿下　いいえ、特には。ですから独学でいろいろと勉強しました。当時、ラテン名まで書いて自分で作った標本は、後で見るとずいぶん間違えていますが（笑）。

柳生　小学生でラテン名まで書いた標本を作られるとは！

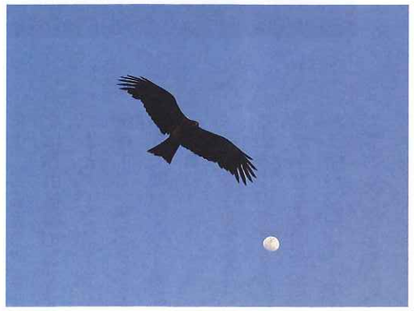
妃殿下　ラテン名表記のある図鑑を買ってくれたのは祖父でした。子ども向けの本を買ってすぐに物足りなくなるよりは、難しいほうがいいだろうといって、大人にも難しそうな本を買ってくれました。

妃殿下の撮影された鳥たち

シマフクロウやオジロワシといった北海道ならではの鳥の観察の合間に、エゾシカをご撮影中。2014年10月（写真／窪田正克）

シマフクロウ（北海道知床半島）

長年のご友人であり、世界を代表するワイルドライフアーティストのロバート・ベイトマンご夫妻を戸隠の森にご案内される妃殿下。2014年5月（写真／中村浩志）



トビ（島根県日御碕）

シロハラチビハチドリ（コロンビア）

イソヒヨドリ（島根県日御碕）

クロガミインコ（アルゼンチン）

2012年3月 六甲山麓にて、神戸支部の皆さんと

野生生物の習性を知り、尊重する

柳生　いまの妃殿下のお話からも、子ども時代の自然体験がその後の感性を育てるうえで非常に重要なことがわかります。しかし最近は、家の玄関にツバメが巣を作ると、不潔だからといって親が叩き落としてしまうという報告も多いのです。

妃殿下　まあ、そんなことがあるのですか。

柳生　ええ。3週間も経てば、ヒナも巣立っていなくなってしまうのですが、それが待てずに落としてしまうというのです。子どもの見ている前で落とすこともあるようですから、子どもの心にどのような影響を与えるのかが心配です。

妃殿下　幼稚園から小学校ぐらいにかけての子どもは、どんなものにも興味を持っています。その興味の芽を摘まないで、虫や動物を怖いものだと思わないように育てていくことが、親や周囲の大人の務めだと思います。

　一方で、野生の生きものに対して「かわいいかわいい」とペットのように接する感覚には注意が必要ですね。ほかの生命体にも人間と同じように生きる権利があって、その命も尊重しなければなりませんが、その考え方を子どもたちの中に正しく自然に育てていくのは、私たち大人の責任ではないでしょうか。

柳生　そのためには、生きものの習性や生態を知ることは大事ですね。

妃殿下　生きものの習性を知っていくと、鳥であれば鳥の気持ちがだんだんとわかってくるようになります。昆虫採集が好きな子どもは、その虫がどう動くか、どんな生態なのかについてもくわしくなりますよね。いまは、「命は大切に。虫取りもいけない」という風潮もありますが、生きものに触れる機会が失われてしまっては本末転倒です。

不潔だからといって、
ツバメの巣を子どもの目の前で
落としてしまうことが、
どんな影響をおよぼすのか心配です。
―― 柳生 博

バードカービングやガラス細工など、鳥の美術品をコレクションするのが趣味という妃殿下。その一部を見せていただきました

柳生　ある昆虫学者が言っていましたが、子どもがどんなに昆虫採集をしようが、それで昆虫が滅びることはないよと。

妃殿下　「かわいそうだから、やってはいけません」ばかりではなくて、親は見守ってあげることも大事だと思います。

　私は女性動物学者のジェーン・グドールを尊敬しているのですが、彼女のお母様がすごい方なんです。ジェーンが子どもの頃、ミミズを連れてベッドに入った時に、お母様が「きたないから外に捨ててきなさい」ではなくて、「ここに置いていたらミミズが死んでしまうから、ミミズが住んでいるところに持って帰ってあげなさい」と彼女に教えたという話があります。

身近な変化にひそむ怖さ

柳生　最近はスズメやツバメといった身近な鳥もだんだん少なくなってきています。

妃殿下　私が子どものころは、朝、スズメの鳴き声がうるさくて寝ていられないなんてことがよくありましたが、今はそういうことはないですものね。

柳生　バードライフでは普通種の保全にも取り組まれていますね。当会でもこれまで、タンチョウやシマフクロウといった絶滅危惧種を保護してきましたが、「普通種も減っている」という現状を広く知ってもらうための取り組みとして、2012年度からツバメの目撃情報を募集するキャンペーンを行なっています。

妃殿下　たとえばツバメが巣をかけられる軒下が減っているといった住環境の変化もあるのでしょうが、一番怖いのは目に見えていない影響だと思うのです。

　例えば、人や作物には無害だという農薬や殺虫剤でも、土壌の微生物やプランクトンへの影響までは未調査なわけです。そういった未知の要因が、種の減少に関わっている可能性があるということは恐ろしいことですね。減少の原因をさまざまな観点から調査することは、とても大事だと思います。

柳生　野鳥には国境はありません。日本だけを見ていても、たまたまその年渡ってくる数が少なかっただけということもありますからね。地球全体で見れば、危機的状況にはないという場合もあるでしょう。

妃殿下　バードライフが果たす役割として、普通種、希少種にかかわらず、その鳥の置かれている状況を世界規模で相対的に把握するということがとても大事だと思います。

日本野鳥の会に期待すること

柳生　最後になりますが、日本野鳥の会は今年で創立80周年を迎えます。今後、会に期待する役割などあれば、お聞かせください。

妃殿下　おめでとうございます。

　鳥類保護というのは、1か国だけで成し得ることではありません。バードライフのパートナーシップのもと、日本野鳥の会をはじめ、各国がともに連携をはかっていくことが、今後ますます重要になってくるでしょう。

柳生　2004年からはバードライフと協働して、海域の重要野鳥生息地を保全する「マリーンIBA」事業を進めています。現在、その選定作業がほぼ終了して、来年あたりには白書としてまとめられるようです。

妃殿下　環境保護では、後手後手に回らずに先手を打って行動することが肝心です。絶滅しかけたものを回復させるのは容易ではありませんが、早い時点で科学的なデータを出して行政にアピールし、未然に防げれば一番良いでしょう。

バードウォッチングの間口の広さは、
子どもたちを育成していくという点でも、
環境保全のために
非常に重要です。
―― 高円宮妃久子殿下

新春特別対談
「野鳥の魅力を語る」

柳生　選定の際に参照した調査データの数々は、当会に90支部ある全国の会員さんの協力があって集められたものでした。

妃殿下　バードウォッチングは、老若男女さまざまな人が楽しんでいて、その間口の広さは環境保全のためには非常に重要です。まず間口が広いから、たくさんのデータを集めることができるわけですから。鳥類が環境のバロメータになり得るのも、その愛好者の間口の広さゆえでしょう。

　もうひとつ、子どもたちを育成していくという点でも、間口が広いからこそ、子どもたちが幅広い世代の人と一緒に、バードウォッチングをしながら経験を積んで行くことができる。そういう中で子どもたちが鳥に興味を持つことによって、鳥が生活をしている環境や生態系というものに興味を持っていく。それが環境保全には欠かせないものだと思うのです。

柳生　その通りですね。

妃殿下　日本野鳥の会は、そもそも鳥が好き、自然が好き、という方々の集まりです。好きな者同士集まってやっているというのは、エネルギーとして1＋1が2ではなく、3にも4にもなっていくでしょう。その発信力も強いものですし、皆さんの経験と専門知識に基づいてできることを精いっぱいなさることで、物事を大きく変えていくことができると思います。

　80年という長い歴史で積み重ねてこられたものはとても大切で、かけがえのないものですから、バードライフの良きパートナーとして、今後もともに活動をしていければうれしいですね。

柳生　ありがとうございます。これからも、「野鳥が好き」という気持ちを原動力に、自然豊かな美しい日本を残していけるように私たちもがんばってまいります。